



大島高校の教室には、ラオスやタイでの生活の様子など国際理解を深めるためのさまざまな情報が展示されている

ラオスで現地調査 その学びを伝えたい

東京から約110キロ、伊豆諸島最大の面積を有する大島。11月のある日、全校生徒125人の東京都立大島高等学校に、海を渡って、先生、がやってきた。

「さて、皆さんにクイズです！ラオスには小学校を卒業できない子どもがどれくらいいるでしょうか？」。2、3年生の教室から、大きな声が響いてくる。その呼び掛けに、生徒たちは真剣な表情で考え始める。「なんと、全体の4分の1もいるんです」。その答えを聞いて、教室にどよめきが起こった。

この先生、たちは、実は、中央大学経済学部・林光洋教授のゼミ生。2010年の夏に現地調査で訪れたラオスについて、この日、大島高校の生徒たちに伝



テーマごとに4グループに分かれて授業を行った。「もっと話を聞きたかった」という高校生の声も

てみよう」
「うーん、学校まで遠いから？」
「そう、それもああるね。すごい！よく分かったね」

生徒一人一人の発言を丁寧に聞きながら、参加型の授業が進んでいく。

現地調査では、ラオスが直面する教育問題を目の当たりにした林ゼミの学生たち。学校までの道が整備されていない、教室の数が足りない、少数民族で公用語が理解できない、働かなければならない……。こうした現実をどうしたら日本の高校生に分かりやすく伝えられるか。考えた末、写真やスライドなどを交えながら質問を投げ掛けることにした。

大学生たち、吉岡先生(右端)、筆者(左端)。「先輩たちから学んだ“ラオス”を、生徒たちはきっと忘れないと思います」と吉岡先生は話す



世界とつながる
教室

えにやってきた。テーマは教育、保健ビジネス、環境の4つ。それぞれグループに分かれての発表が始まった。生徒たちも自分の関心があるグループの輪に入り、彼らの話に聞き入る。

教育グループでは、ラオスでの課題を考える授業が行われている。

「では、小学校を卒業できない理由は何だと思えますか？何でもいいから答え

「この課題と、どう向き合うべきだろうか？」

すると生徒たちからは、「学校に通うのは、私たちに普通のことでも、ラオスではそうではないんですね」「自分に何ができるかは難しいけど、募金からでも始められたらいいな」と、次々と意見が出された。

別のグループでも、先生、がラオスで見てきたことを説明し、活発なディスカッションが行われていた。保健グループでは、ラオスの母子保健の現状や課題についての授業。「保健衛生が充実していないラオスには、日本がもっと国際協力をするべきだと思う」と3年生の宮本吉春くん。また、環境グループで森林破壊に関する話を聞いた3年生の鈴木悠悟くんは、「開発途上国からの木材輸入がストップしてしまったら、僕たちは生活していけなくなるかもしれない」とうなずいていた。

JICAをハブに広がった 人と人のつながり

この授業が実現したのは、2009年、東京のJICA地球ひろばで行われた国際協力イベントの運営に林ゼミの学生が協力したことがきっかけだった。このときにつながった縁を生かし、ゼミ生たちがラオスの現地調査で得てきた成果を、JICA教師海外研修に参加した教員がいる都内6つの中学・高校で発表することになったのだ。

大島高校で地歴・公民を担当する吉岡大輔先生は、昨年4月に赴任したばかり

大学生が先生に！ 大島の高校生と考える ラオスの現実

ラオスで見て学んだことを、自分の言葉で伝えたい。そんな思いで中央大学の学生たちが訪れたのが、伊豆諸島の大島にある東京都立大島高等学校。出前講座を通じて、高校生とラオスが抱える課題について考えた。

文〓 依田武則 (JICA多摩地区デスク 国際協力推進員)



ラオスの教育について高校生に分かりやすく伝えるため、授業には写真やスライドなどを活用

の大島高校で開発教育の授業を始めたといと、同年8月にJICA教師海外研修に参加。「島での生活は、どうしても外の情報に触れる機会が限られてしまっています。でも、世界に目を向けることで途上国での課題を知り、そこから自分たちが住む地域についても見つめ直してほしい」と話す。「大島が抱える超高齢社会などの課題にどう取り組んでいくか。途

上国の人々が自立し、課題を解決し、発展していく姿から、私たちはたくさんの方を学ぶことができると思うのです」。高校生が途上国について考える機会はその多くない。しかしそんな彼らに、同世代の先輩たちが授業を行うことで何かを感じ取ってくれたら。出前講座を企画した林ゼミの入江遥さんは、「実際にラオスに足を運び、現地の人と触れ合い、自分の目で現状を見たからこそできた授業。私たちにとっても貴重な機会でした」と話す。指導教官の林教授も「自分の経験を高校生に伝えることで、彼らの学びがより深くなったのではないかと、この取り組みを評価している。

大切なのは、学んだことを自分の中に留めておくのではなく、多くの人に伝え、共有すること。生き生きと自分の経験を発表する大学生と、目を輝かせながらそれを聞く高校生。お互いが出前講座を通して国際協力への理解を深め、広い視野を持ち、日本の未来を担う人材へと成長してくれることを願う。



「ラオスでは自宅出産が多く、危険を伴います。出産時、へその緒を切るのに竹を使ったりもします」。母子保健の問題についてイラストを使って大学生が説明